



## 「人新世」の科学ジャーナリズム

北村 行孝

JASTJ30周年の年も暮れようとしている。新聞記者やその後の大学教員生活を終えて、半世紀分のスクラップ、資料類などを整理・始末していると、科学・技術を取りまく時代の激変ぶりを改めて痛感させられる。

時代の変化を概観するのに、100年間で四等分すると便利である。筆者が生まれたのが20世紀真ん中の1950年。広島・長崎の原爆被災、日本の敗戦からわずか5年後で、当時の世界人口は25億人。この年からの25年間は、ちょうど日本での科学ジャーナリズムの胎動期に当てはまる。

### 黎明期の歩み

敗戦の荒廃から立ち直るために科学技術が重視され、原子力委員会や科学技術庁の発足などが相次いだ（56年）。旧ソ連が初の人工衛星を打ち上げ（57年）、米ソの宇宙開発競争も激化しようとしていた。こうした状況に対応するために、55年から60年にかけて日本では主要全国紙や通信社に科学部など科学技術取材部門が相次いで生まれた。

「科学・技術」がまだ夢や輝きを失っていない時代で、一般市民にその先端をわかりやすく伝えることに力が注がれた。JASTJ二代会長の牧野賢治さんは、こうした頃を「啓蒙的科学ジャーナリズム」の時代と分類している。

### 社会のなかの科学技術へ

75年から始まる次の四半世紀には、公害問題をへて地球環境問題が意識され、生命科学が急進展を見せ始める。このころに、筆者の記者生活も始まった。

生まれたばかりの遺伝子組み換え技術の適用を巡って研究の条件付き停止をめざす「アシロマ会議」(75年)が開かれ、米TMI原発事故（79年）、旧ソ連チェルノブイリ原発事故、米スペースシャトル「チャレンジャー事故」（ともに86年）

など巨大科学システムの事故も続く。科学ジャーナリズムも、「社会のなかの科学技術」に視野を広げなければならない時代に入った。

こうしたなか、94年にJASTJが誕生している。世界人口は60億人に迫ろうとしていた。また、ネット社会が急進展をはじめ、社会の情報環境を激変させていく。科学ジャーナリズムに加え、科学コミュニケーションの必要性も指摘されるようになった。

### 人類文明危機の時代に

続く21世紀初めの四半世紀は、まだ記憶に新しい。2003年には、100年かかるといわれた「ヒトゲノム計画」が完了して生命科学が加速。人間活動の拡大はとどまるところを知らず、10年には世界人口が70億人を突破。地球環境問題の“元凶”が人類であることが鮮明になり、現今の地質年代名を「人新世」に改称すべきという提唱もなされている。

世界情勢も混迷の度を深め、核兵器の廃絶が遠のくばかりか、AIや宇宙空間の軍事利用なども現実的な危機になってきた。フェイクニュースが世界を侵食しつつもある。「人類文明の危機」という言葉が大げさではない時代に、科学ジャーナリズムはどう進むべきか。

大きすぎるテーマではあるが、危機の実相を解き明かして制御の方策を探るためにも、科学ジャーナリズムが対象とする「諸科学の営み」が欠かせないのも現実である。

科学や技術分野に限らず、フェイクの時代に抗して「ファクト（事実）」を掘り起こして適正に広く伝える手間暇のかかる活動の必要性は、ますます高まっていくのではないだろうか。21世紀第二の四半世紀を前に、そんなことを思っている。  
(JASTJ監事/会員)

## CONTENTS

巻頭言	1
ニュース	
J塾開講と取材実習	2
例会報告(9月) 生成AI時代の教育	4
例会報告(10月) 認知症研究の最前線	5
特集 JASTJ創立30周年 その3	6

例会報告(11月) 見学会 情報通信研究機構(NICT) 訪問	8
WEB井戸端会議 虚飾のユニコーン	9
追悼	9
オピニオン/賛助会員・団体	10
理事会から/賛助会員・団体	11
事務局だより/新入会員/会員のBOOKS	12